



進修同窓会HPにアクセス



金峯山寺蔵王堂

手前の石柵内は大塔宮が生別の酒宴を催した故地とされている

土浦中学校の修学旅行 9 中学校 30 回生の関西旅行 3
1930 [昭和5] 年6月1日から8日に掛けて実施された土浦
中学 30 回生の関西旅行。今号では樫原神宮、吉野、大阪と巡
った4日目の行程を『進修第32号』『関西旅行記』と『中三十
回卒業五十周年記念誌』中30回松井喜一郎「旅行記余聞」とで
綴っていきます。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。
なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

第四日(6月4日) 五年 中村貞之助

「ねむい目をこすりながら一同起床したのは丁度五時頃でした。朝食の準備は全く整つて居たので直ちに食を済まし、愈々出発の準備に取りかゝつた。ついで六時に宿(奈良市三条通 敷島館)を

発し奈良市油坂の【大阪電気軌道、略称「大軌」。(現近鉄)】停留場を六時十七分に発し、二十分の乗車にて、西大寺駅に着【大軌畷傍線(現近鉄樫原線)に】乗換同駅六時三十七分車中にて、舟漕ぎの練習をするのも少なくはなかつた、之も昨晩の睡眠不足の為であらう。そうして居る中に電車は次第に進み、七時十三分神宮御陵前駅【正しくは「畷傍山駅」、現近鉄畷傍御陵前駅】着

ついで

歩行数町にして、神武天皇畷傍東北陵を参拝す、我等旅衣の塵をはらひて、御前に額づく、思ふ、昔神武天皇、天祖の遺訓を奉じて、此処に皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆んど三千年、君臣の分、明かに、父子の親厚く、世界に類なき此の一大帝国を成し給へり、吾等、此の国に生れ、此の君の御流を奉じて此の土に生育するも皆いかでか限りなき感慨胸に溢れぬ者があらう。

次に樫原神宮を参拝す。神宮は畷傍山の東南麓にあり、皇祖神武天皇高御座【たかみくら 天皇の位の称】に即かせ給ひし霊地、神宮は、明治二三年頃創建、祭神は神武天皇及び其の皇后にして、官幣大社に列す神殿(東西十間南北七間)

は京都内裏の内侍所(拜殿)東西八間二尺、南北十三間二尺)は神喜殿を賜りて、移し建てたるものであると。

我等一同はかくの如き、大社に詣てたる時、誠に、かたじけなさに自ら涙こぼれ一種無量の感に打たれてしまふのである。

かくして樫原神宮前停留場発、八時、久米寺駅にて【吉野鉄道、現近鉄吉野線に】乗換発八時五分吉野着八時五十九分直ちに登山、途中の茶屋に一同荷物を預け、或は腰にサイダー、ラムネ等をぶらさげて、然し乍ら、神社等に参拝する時は、かやうな醜い姿はしなかつた。先ず第一に、吉野と言へば直ちに後醍醐帝、村上義光(忠烈)の忠烈を思はない者はないであらうが、又名勝の区、窮りなし「あさぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪」(風流温雅の雪は「眉雪老僧時轆帯落花深处説南朝」の悲憤感慨の山となりたるを聯想せぬ者はあるまい。

【金峯山寺】蔵王堂に詣れば、先ず山門を見る、甚だ荒涼たり、村上義光が大塔の宮【護良親王】の御鎧を撰し【かんし 鎧、冑を身に纏う】詐り名乗りて健闘し終に腹を割き、腸を抉出【けつしゅつ】えぐつて内部の物を出すことし賊【鎌倉幕府軍】に抛ち【なげうち】て『最後の模範にせよ』と呼びりしは、正に、此の門上欄干の辺なり。と想を馳するも悲しさに堪へぬ、門を入れれば、一庭落莫蔵王権現堂あり、堂は粉壁【ふんぺき 白い壁】朱楹【しゅえい 楹は丸く太い柱】簷【えん

のき】高く啄む、堂の前の中庭は即ち大塔の宮が生別の酒宴を催したまひし処である。今は此処へ幼木植多つけられて注連縄【しめなわ】がめぐらされてあつた。かくて次第に歩を進め屈曲多く、或は急或は慢なる道を皆疲れ切つて、よたこら歩み更に溪畔の逕を行き杉の森を過ぎて、一坂のぼれば則ち後醍醐天皇の英霊の長へ【とこしえ】に、在します

処である。御陵は北に向へり。『常に北闕を望む』と宣ひ慷慨して、剣を按じ給ひし事を憶へば誰れか涙を随さざらん、御陵の上松柏森然【しんぜん 深く茂つたさま 巖かなさま】颯々【さつさつ 風がさつと吹くさま。また、その音の形容】として天風【てんふう 空高く吹く風】に鳴る。御陵の左右に桜樹多し、御陵の下、数十歩にして小楠公の髻塚【もとどりづか】あり、数百歩にして如意輪寺あり、ついで正行の梓弓の歌扉【うたひら】を拝観す、鏝痕今猶鮮明なり、之を拝しては誰しも、己が心中に、忠義の心、更に深からむを感ぜぬ者はなからう。



後醍醐天皇陵

